

渋沢栄一ツアー ・ 5

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

前号に続き渋沢栄一五代目子孫の渋沢健氏の講演をレポートします。講師の話も流石栄一の子孫としての講演は聞けば聞くほど幅広く奥深くなっていく。興味は尽きない。

◇現代の渋沢栄一精神

三菱の創始者岩崎弥太郎は才能がありあまる経営者で資本を支配する株主資本主義者であった。一方渋沢栄一は、企業の価値をつけるには、経営者と社員と周囲の仲間や、さまざまなステークホルダーが集まり価値をつける合本主義、ステークホルダー資本主義とも言えるのではないか。

現在のアメリカ経済も同様、GPモルガン、事業でトップと社員従業員も参加し共にシェアホルダーとして経営を共有にしている。これが、時代の求めている新しい資本主義だ。栄一の資本主義の原点に注目すべき時だ。

◇カルロス・ゴーン

日産を立て直したと言われるが、会社を食い物にして私欲を肥やし最後は犯罪にまで手を染めた。富を不正に独り占めした。栄一の言う「論語」の真摯さは捨てている。逆なことをした、これでは事業家ではない。犯罪者だ。

◇人間とAI

人間はすぐ忘れる。忘れなければ人間の頭は膨大な情報とデータでパンクしてしまう。しかしAIは忘れることもなく、更に情報をデータに変換する貴重な能力を持っている。人間は時々失敗する。AIは失敗しないが、ただし、データ以上のことはできない。データを創り出すのは人間であり、「未来を見通す力」は人間の情感が勝っている。

◇チンパンジーと人間

生物学者に言わせれば、人間とチンパンジーの違いは、想像力と創造力の差だ。チンパンジーは自分の周りのことはわかるが自分までしかわからない。人間は孫子の代まで心配する能力がある。山の奥にいるチンパンジーは外の世界を知らない。人間は、離れている地球の他の場所へ自由に行けるし、宇宙のことも考え行動することができる。見えないものも情報を繋ぎ合わせてみるができる。

◇SDGs

2015年国連採択、日本でも2019年SDGsの実施指針を発表した。17のゴール、169のターゲットから構成されている。2030年までに持続可能なよりよい社会を目指し誰一人取り残さないことを誓っている。全ての人の働き甲斐づくり、認知度の向上、社会貢献のツールづくりが課題となっている。

1969年に達成したムーンショットまでバックキャストの経過を検証しフィードバックが重要になってくる。SDGsは2030年のゴール達成のためのツール化を作成せねばならない。この原則は前号で述べた大谷翔平の計画も同じことが言えるのではないか。

企業家は2030年までに、「持続可能なより良い社会を目指しだれ一人取り残さない」ことを、2030年と言う遠いところに大目標を定め、バックキャスティング、フォアキャスティング、マーケティングし、新しい価値の創造へ進まねばならない。しかし、ここで栄一の言う論語と算盤となれば、8番目の「産業と技術の革新」としてマーケティングと働きがいと経済とが共通点となり、経済もということになる。

◇兜町村

東証設立147年、銀行発祥の地、日本初民間銀行第1号の第一銀行は、明治6年(1873年)スタート時は全くのベンチャー企業であった。前にも触れたがお金は一滴一滴では力なし、集まってこそ大きな力になる。

◇一滴の雫が大河に、山に降った雨は、一滴の雫、雫は小川になり大河になる。

今、資本主義は格差を生むと声高に叫ばれている。しかし産業を栄えさせるには資本が必要だ。何故、雫に等しい小さなお金が集まるのか。そこには「お金を惹きつける力だ」があるからだ。

◇大富豪がお金を増やしている

大富豪のファンドが金を増やしている。なぜだ。共感して同じ場所に集まるからだ。強弱資本が集合しお互いの不足を補い足し算となり、次は掛け算になる。これを共創掛け算効果と称する。渋沢栄一は、これを「合本主義」と称した。

共感、共助、共創である。

◇未来は少子高齢化時代に入るが、ここは発想を変えて成長は続くとみる。

大きく見ると、昭和時代の60年間は、戦前、戦中、戦後の混乱を経て破壊と混乱の30年、次に高度成長の30年、石油ショック、総需要抑制策、そしてバブルは行き過ぎパンクした。「失われた20年」が訪れ低成長デフレ経済に苦しんだ。多少の年代順の違いはあるが、おおむねこのようなプロセスを経ている。

昭和25年(1950年)から繁栄と破壊を30年毎に繰り返してきた。ここでも人生・企業30年説から景気も30年説の裏付けが取れたような気がする。やがて繁栄は「おごり」を産み破壊、反省し、ここから、新しい時代が見えてくる。

◇2020年は大きな時代の節目

令和の時代に入ると、昭和45年(1970年)生まれの団塊世代が50代になった。この厚い人口層が稼いでくれるようになる時代に入った。

◇人口構成と消費動向

団塊ジュニア時代の昭和60年(1986年)バブル発生、土地買い占めをはじめ爆発的な需要が起こった。平成3年(1991年)バブル崩壊し平成の低成長時代に入る。90年代は人口構成が瓢箪型となりその「ひょうたん」のまま、2000年代にスライドしてきた。瓢箪型人口構成が上に伸びてきた。

指標となるお金は、昭和46年(1971年)～昭和49年(1974年)生まれの団塊ジュニアたちは高度成長の影響なく大きな買い物をした経験が少なく、しかも受け取るお金が減る社会を経験した。

◇主役はジュニア

日本近代化社会の同期性主役は、東南アジア、ASEANの諸国の20代、30代のジュニア達だ。未来は見えないが見えない未来の可能性は何だろう。ポイントは東南アジア、ASEAN諸国のジュニア達だ。

◇インターネット時代

国境なし変革スピード感広まり必ずこうなる未来は見えない。インターネット時代を迎え、彼らの頭のスイッチには、国境という概念がない。東南アジアや、インドまで含めた彼らの人口は約2億6千万人と推定されている。年齢中心値28歳、日本と違い20歳若い。彼らの消費動向が今後の経済を左右する。年齢中心値をみると韓国は少子高齢化傾向だが、アフリカ54ヶ国総人口15億人、ナイジェリア2億人であり若者の比率は高い。インドの若者の中心値27歳と最年少だ。これらの国々では年齢の中心値層は倍増している。

日本と世界は繋がっている。若い途上国は仕事で稼ぎ、成長の伸びは日本企業に恩恵あり、更に、日本をはじめこれらの諸国の環境問題で、もう一段大きなスイッチが入るのではないかな？

◇若い世代にスイッチを入れる環境づくり

若年層をターゲットにした環境づくり。若年層に使われるような商品開発が大きなポイントとなる。

◇企業は新陳代謝の時代、変化に対応し変身せねばならない。できない企業は退場することになる。経済の節目とされる30年循環が巡ってきたと気付かねばならない。

続く



出典：<https://search.yahoo.co.jp/image/>